

中央大学父母連絡会

2022

7

Vol.332

Kusa no Midori

草のみどり

Special feature
FRONT LINE 文学部



Chuo University Parents Liaison Association

国際経営学部



Vol.14

「何でもやった」3年間で 就職活動の基礎に

国際経営学部国際経営学科4年
北海道北見柏陽高等学校出身

いまむら しんゆう
今村 心祐



ンサルタントとしての実績もある教授の下での活動は、コンサルティング業界の就活で最も重要な「論理的思考力」を身につけ

「やりたいことは何でもやる」をモットーに国際経営学部で過ごした3年間は、すべてが刺激的だった。例を挙げると、「エンジニアインターンへの参加」や「学部広報誌の制作」などに取り組んだ。また、就活を終えた現在は、研究室で「経路計画アルゴリズムの研究」をしている。一般的な国際経営学部生のあるべき姿かと問われると疑問が残るが、無駄だった経験は一つもなかった。現に、コンサルティンク系企業での就活においては、社会科学系専攻の学生はおろか、応用科学系専攻の学生ともやり合うことができた。今回は、これまでの挑戦がどのように就職活動へとつながったかを整理し、お伝えしたい。

一人目の先生との出会い

これまでさまざまなことに挑戦してきたが、講義をおろそかにしていたわけではない。入学してまだ間もないころ、私は学部の講義で綿貫雅一先生と出会った。「講

義であってもスーツを着ている」「海外の国際機関に勤務していた」という事前情報を得ていたこともあり、先生の第一印象は正にエリートそのものの。「自分は講義についていけるのだろうか?」と心配したことを覚えていいる。

そんな先生の下で私が学んだことは、「他者への尊重」である。どのような立場や背景の相手であっても、一個人として対等に接する先生の姿に感銘を受けた。今後、社会人になるにあたって、先生こそ自分のめざすべき姿であると感じた。

私が綿貫先生の講義に「学生アシスタント」として半ば強引に参加させてもらっていたときのことである。講義中、先生は学生に対し時折質問を投げかける。その質問は講義のテーマの性質上難解なものが多く、履修を終えたはずの私でも悩むくらいのものだ。そのため、質問された学生は自分の仮定を織り交ぜつつ答えることになるのだが、先生は学生が答えを終えるまで

しっかりと聞き、最後には建設的なフィードバックをする。これにより、常に温かな雰囲気の中で議論が行われ、円滑に結論へと導かれていった。就活を終えた今でこそわかるが、先生が実践していた「他者の意見を尊重し、それをより良いものへ昇華させる」というプロセスこそ、一般的な企業の選考方法の一つである「グループディスカッション」を突破する上で重要なものであったと感じている。

二人目の先生との出会い

私は現在、中村潤教授の研究室に所属し、幸運にも研究室の代表の役職を与えてもらっている。中村ゼミへの所属を決めた理由は、研究テーマが自由であったことと、中村教授の経歴や研究分野の幅の広さから「この教授の下でなら自分を高められるだろう」と率直に感じたことにある。私の予想通り、いやそれ以上に、教授からはさまざまな知識や技術を学んでいる。特に、コ



研究室のみんな

学生アシスタントとして
半ば強引に参加した綿貫先生の講義



インターン先にて

き方を理解し
ておいた方が
マネジメン
トしやすくな
るのでは？」と
考えたからで
ある。実際、
インターンで
業務を行って
いくうち、実

研究室に所属して数カ月がたったころ、私は教授の紹介でIT企業のインターンに参加した。任された業務は、自社開発のソフトの機能開発。趣味でプログラミングをしていた程度の私にとっては挑戦的な試みだった。なぜ、経営学部生なのにエンジニアとしてのインターンなのかというと、「将来IT企業を起業する際、エンジニアの働き方を理解しておいた方がマネジメントしやすくなるのでは？」と考えたからである。実際、インターンで業務を行っていくうち、実

エンジニアインターンの意外な効果

る絶好の機会であったと感じている。代表としての最初の仕事で、研究室の係について決める際、最適な係の人数を求める必要があった。当初、私ともう一人の代表は「大体〇人くらいがいいんじゃないでしょうか？」という風に、感覚で人数を提案した。すると、教授から「それはなぜ？」と指摘され、返答に困ってしまったことがあった。それ以来、私は常に教授の「それはなぜ？」に答えられるように意識をするようになった。結果、鍛えられた「論理的思考力」は、私の就活の根幹を支える基礎となった。



GLOMAC Award表彰式にて
(プログラミングサークルでの貢献により受賞)

このように、一見関係ないようなことをしていても、それがうまく噛み合っただけでプラスに作用することがある。皆さんも、やってみたいことにとりあえず挑戦してみたいかがだろうか。私は今後数カ月で、「経路計画アルゴリズム」に関する論文を執筆する予定だ。数学は小学生時代に100点満点のテストで60点をマークするほどの苦手分野だが、やってみたいので挑戦するつもりだ。

終わりに

務レベルの会話にもついていけるようになり、就活においてもこれが役買うこととなった。面接でITリテラシーを問う質問をされた際、私がインターンでの実務経験を踏まえた返答をしたところ、これが現役で働いている面接官の方の心に刺さったようで会話が広がった。ついには、「正直言っ、ここまで深い話をする学生はあまりいないので、つい話し過ぎてしまった」と言われるほど、面接において他者との差別化を図ることができた。これらのことから、インターンでエンジニアとしての実務経験を積んだことが、結果的に面接を有利に進めることにつながったことは否定できない。

国際経営学部だより

講義での形式知と暗黙知の融合

国際経営学部教授 堀 眞由美

ご父母の皆さま、日頃より中央大学の教育にご理解、ご支援をありがとうございます。

コミュニケーションのネットワーク化・デジタル化により、ビジネスでのコミュニケーションは、対面・オンライン・電話・手紙・メールなど多様化しています。世の中の変化が激しい現在では、これまで以上にスピードが求められるため、その時に応じた最適なコミュニケーション手段を柔軟かつ迅速に使いこなすことが求められています。

知識には、言葉等によりほかの人に伝えることのできる知識（形式知）と、ほかの人に伝えることができない個人内部の知識（暗黙知）があるといわれています。たとえば、「自転車に乗る」「逆上がりができる」「職人の技」などは、ほかの人にその方法を言葉などで伝えるのは難しく、実際に教えてもらったことをみずから体験して初めて徐々にで

きるようになるものです。このように、経験や体験により身についた知識は暗黙知と呼ばれます。

社会でさまざまな人々と良好な人間関係を築き、コミュニケーションを取ることは、仕事を遂行するときだけでなく、人生を生きるうえでもとても大切なことです。担当している「ビジネスコミュニケーション」は、キャリア教育として位置付けられており、グローバル社会におけるビジネス基礎力と運用能力を学修する授業です。知識（形式知）だけでなく、実践知として授業の中で講義内容を実践すること（暗黙知化）を心掛けています。良好な人間関係を築くには、まずは相手への思いやりや、周囲への気配りが求められます。身だしなみや言葉遣い、ビジネスマナー、社内／社外文書やメールの書き方、テレワークのマナー、国際プロトコル（国際儀礼）等、いずれもビジネス社会で必須の講義内容です。

国際経営学部では、学生がグローバル社会で活躍できるように今後もキャリア教育のさらなる充実を図ってまいります。